# フリードリヒ・ヘッベルの悲劇『ヘローデスとマリアムネ』をめぐって
## ――近代社会と愛

奥田　敏広

### 第一章　王妃マリアムネは「犠牲者（Opfertier）」か？

ヘッベルの描く古代ユダヤの専制君主ヘローデスは、その最愛の妻マリアムネに自分が死んだ際のために、あらかじめ殉死の約束を要求するが、いくら頼んでも拒絶されるので、彼女が殉死しない場合は殺害するよう部下に命じる。曲折を経たのち結局ヘローデス王は王妃マリアムネを「裏切り（betrügen）」の罪状で処刑してしまうが、その後でマリアムネが実は「裏切」ってはいなかったという真実を聞かされ、その衝撃に倒れ込むところで悲劇の幕が下りる。

このように要約すると、暴君ヘローデスの「犠牲者」としての王妃マリアムネ像がすぐに浮かび上がってくるかもしれない。ここでは、夫である専制君主の家父長的な横暴さに蹂躙される妻の「人間性」が「犠牲」になっている、と。しかし、実は事情はそれほど単純ではない。というのも、一見明らかな「犠牲者」に見えるマリアムネ自身に対して、日本の佐藤正樹も言うように、「マリアムネは研究史の初期に与えられた栄誉ある座から次第にひきずり降され続けた」[1]

というような状況が、たしかに存在しているからである。

なるほど、ヘロデ大王とも呼ばれキリスト生誕時のユダヤを支配した専制君主ヘローデスについて、その残虐な暴君ぶりを伝える資料は、救世主誕生を恐れて領内の幼児全員を殺害させたというかの福音書の記述を始め数多く存在している。そして、あのハンス・ザックスやカルデロン、ヴォルテールをはじめとして多くの作家たちが素材として作品を作ってきたが、成立史の研究が示しているように[2]、ヘッベルがこの戯曲の直接の題材とした資料は、ヘローデスと同時代を生きたあのユダヤ人フラウィウス・ヨセフスの『ユダヤ古代史』であった。そこでのヘローデスは成り上がり者の横暴な征服者であり、本来はユダヤの支配者たるべき由緒正しいマカベア朝の娘であるマリアムネを妻にすることによって王としの正当性を手に入れた専制君主である。しかもヘッベル自身、日記に脇役の一人である副王ヨーゼフらの動機付けを除き、「素材にはほとんど手を加える必要がない[3]」とまで記している。

実際また、あの悪評高い幼児虐殺の命令もまた、ヘッベルの戯曲にその結末近くで取り入れられている。王妃マリアムネの真実に衝撃を受けた彼は、口では強がってみせ、残虐な暴君としての姿を決定的にするその命令を下すのである。劇中で王妃マリアムネは、無理やり殉死を強いる夫の法外で横暴な意図とやり口を知ったとき、すでに次のような弾劾の叫びをあげている。

あなたは私の中の人間性を
侮辱したのです、誰もが私と同じ苦しみを持つに違いありません、
私自身のように人間である限りは、
〔中略〕

誰もが人生をもっており、その人生を奪われることを
誰も望みません、その人生を与えた
神によって以外には！　そのような冒瀆を
全人類は地獄の罪に落とします、
その冒瀆をなるほど始めさせはしたが、成就させはしなかった
運命が地獄の罪に落とすのです、
あなたは自分自身を地獄の罪に落とすのです！
私の中の人間がこのように深くあなたによって
傷つけられているなら、言ってください、妻は何を感じるべきなのでしょう、
私は今後あなたにどのように対し、あなたは私にどのように対するのでしょう？（1684-1701）

戯曲の主人公の一人である王妃マリアムネの、聞く者の心に響かずにはいないこのような悲痛な叫びをそのまま信じるなら、たしかに彼女は「犠牲者」であるに違いない。そしてまた、ヨーロッパ中に二月革命の嵐が吹き荒れていた一八四八年に完成し上演されたこの戯曲が、当時の「政治的・社会的緊張を反映する鏡」[4]として、すなわち君主制に対する市民の独立と自由を求める要求の表現として歓迎されたのも当然だと言わねばならないだろう。そこにはまた人間一般の尊厳という問題に加えて、イプセン流の女性の自由と独立というメッセージを読み取ることも可能であろう。

たしかにヘローデスの行為には、女性の、そしてそもそも人間存在全体の、自由と自主独立、そして尊厳に触れるも

のであり、近代社会の根幹をなす「人間性（Menschheit）」の侵害に震えるものがあることは否定できない。王妃マリアムネは、そのような「人間性」の尊厳を「もっとも神聖なもの」（2202）と呼び、それを蹂躙するヘローデスの行為を人間を「物に貶める（zum Ding herabsetzt）」（2203）冒瀆とするのである。この生きた人間を「物」や「手段」としか見ることができないというところに、マリアムネのヘローデス糾弾の核心があり、この戯曲作品をめぐる批評もまた、それを肯定するにせよ否定するにせよ、この問題を主要テーマのひとつとしてきたのであった。

しかしながら、横暴な専制君主像を打ち出す『ユダヤ古代史』にそのまま従ったというヘッベルの自作解説に惑わされず、この戯曲に先入観なく虚心に接する者は誰でも、先に見てきたような状況にかかわらず、もっぱら「犠牲者」であるというマリアムネ像には違和感を持つに違いない。というのも、そもそも作者の自作解説は絶対的なものではないし、特にヘッベルの伝説素材との関係についての発言は注意が必要である。先のような「人間性」の尊厳に訴えるマリアムネの告発によく表れているように、それは素材となった古代の女性の意識というよりも近代社会の人権意識を反映しており、そこでの心理や支配の構造は、ヘローデスを古代の専制君主としマリアムネをその「犠牲者」とするような単純な論理で片づけることはできないからである。この戯曲が扱う時代の問題は作品全体の解釈の中でも非常に重要で、第四章でまた詳しく言及したい。

しかし、さしあたってマリアムネが「犠牲者」かどうかに関してより決定的なのは、強調の違いはあれ大抵の批評家も認めざるをえないように、ヘッベルのマリアムネは押しつけや強制でヘローデスに従っているのではなく、実は少なくとも彼女なりに純粋に心から王を愛していること、しかも弟アリストボロスを彼に暗殺され、また殉死の要求をされたあとでもまだ愛しているという事実である。このことは、代々ユダヤを支配してきたマカベア朝の一員であるいう意識が強く、成り上がり者のヘローデスにしぶしぶ屈服した後に息子を暗殺されてしまい、ヘローデス復讐を目論む母ア

レクサンドラと比較すれば良く分かる。そういう母アレクサンドラにマリアムネは、自分がヘローデスと一心同体であることをはっきりと宣言する。

私はあなたの復讐の渇望を
封殺しようとは思いませんし、何の復讐をするのか、
あなたの目論見の復讐か、息子の復讐なのかを問おうとも思いません。
進めるなり止めるなり、望むことをしてください、
ただ、これだけは間違わないようにしてください、もしあなたがヘローデスを
討つことができるなら、それは同時にマリアムネも討つということを。（1080-1085）

これに続けてマリアムネはさらに、殉死の約束、つまり「彼が別れ際に要求したときには拒否した誓約を今は行います」と言って、

彼が［アントニウスとの争いで］死ぬなら、私は死にます（1088）

とまで、実の母には断言するのである。彼女もまた、殉死を必ずしも否定しているわけではなく、そこに愛の可能性を見ていることが分かる。

しかし、それならあのヘローデスへの拒否、ヘローデスが執拗に手を変え品を変えて、あるときは威嚇し、あるとき

は王の体面をかなぐり捨てた懇願と哀訴により繰り返す要求への拒否はどういうつもりなのだろうか。次章ではまず、そこに見られる王妃マリアムネの問題に注目したい。

## 第二章　愛の悲劇

なるほどそのようなマリアムネの心理に対しても、注意深く読むなら、すでに冒頭近くで彼女自身が一応次のように間接的に説明してはいる。つまり、火事の中で焼け死んだ夫のそばを離れようとせず自分も死んでしまう女をヘローデスは目撃するが、それについて妻のマリアムネに「この女をお前は軽蔑するだろう?」（432）と問うのに対して、マリアムネはこう答えている。

誰がそんなことを言っています?
彼女は犠牲者（Opfertier）にされたのではないのですよ、
自ら犠牲になった（sich opfern）のです。それが証するのは、
その死者が彼女にとってこの世界以上のものだったということです。（432-435）

すなわち、殉死を「死者をこの世界以上のもの」と考える愛として認めつつ（また自分でも実行すると言いつつ）、一方でマリアムネは、それがあくまで自由な自発的行為であることを要求し、その強制を断固として許さないのである。

たしかに微妙で厳しい要求ではあるが、一応は納得できる説明と言わねばならないだろう。

しかし、とするならマリアムネは、そのよう夫婦の愛と未来に関わる現実の微妙な事情について、もっと真摯に説明し話し合うべきではないのか？　ところが戯曲のマリアムネは、相手の威嚇と横暴さを舌鋒するどく糾弾する一方、夫の切羽詰まった懇願と哀訴には、はぐらかしと沈黙に終始するのである。実際、ヘローデスとの対話において彼女はしばしば最後まで語らず話を止めるし、彼女が「沈黙する」という ト書きもよく出てくる。それに対してヘローデスが「お前は沈黙するのか？」と問い詰める場面もある。先に見てきたような、マリアムネをもっぱら「犠牲者」として捉える批評家たちは、そのような彼女の問題点というべき面にほとんど目を向けないが、しかし、逆に彼女の非難すべき面にもっぱら注目しようとする批評家も少なからずいるのであり、そのような批評家の着目する点のひとつが、まさに今私が指摘したような、マリアムネの「沈黙」に見られる、打ち解けない態度に他ならない。

たとえば、その博士論文『若きヘッベル』（一九五六年）以来、論文集『フリードリ・ヘッベル　作品と影響についての新しい研究』（一九八二年）に載せたマリアムネ論を経て、それを大幅に増補し、近年の個人論文集『フリードリヒ・ヘッベルの悲劇』（二〇〇六年）に収めた「拒絶、利己化、強制」と題する論考にいたるまで、首尾一貫してマリアムネに厳しい目を向ける研究者の一人に、著名なゲルマニストであるヴィトコフスキーがいる。彼によれば、二人は「お互いに愛し合い、また互いに和解しようと望んでいる」[5]。しかし、弟の暗殺の事情や殉死の要求に、心の底では理解を示しながらも、それをマリアムネが言葉を尽くして説明しようとしないことが、ヘローデス王をますます性急に、そして横暴にしていく。彼女の打ち解けない「沈黙」が「それのみが救いと緩和と和解をもたらすことができるであろうコミュニケーショを破壊している」のであり、「その沈黙と結びつくことによって彼女の話は不明朗さのみならず、間違った外観を生み出し」、それがまた「ヘローデスの疑惑を招く」[6]という、いわば負の連鎖となっている、というのである。

ヴィトコフスキーによれば、しかし、悲劇の原因としてのそのような「失敗したコミュニケーション」[7]の責任がマリアムネにあるばかりではない。マリアムネについては、冒頭で見たような、自由と独立に基づく「人間性」の尊厳を踏みにじり、人間を「物」や「手段」としてのみ扱っているという、ヘローデスに対するそれはそれでもっともな批判にも問題がある、とヴィトコフスキーは指摘する。というのも「犠牲者の弁護士」としての「マリアムネの騎士」[8]というべき批評家たちが見落としていることであるが、そのような高邁な正論を突きつけるマリアムネ自身もまた、人間を「物」や「手段」と見なす資質と無縁ではないからである。たとえばヴィトコフスキーは次のような王妃マリアムネの発言に注目する。

何のための王笏でしょうか？
憎しみや愛を満足させるためでないのなら。
蝿を追い払うには小人で十分です。（1172-1174）

ここには、王位に対する強権的な考えが見て取れ、王妃マリアムネもまた夫のヘローデス王と同じく、権力志向的な考えと無縁ではないことが窺える。

そのようなマリアムネは実際また、夫を「人間性」の尊厳の名の下に糾弾する一方、自分もまた他の周りの人間に対しては、彼らを手段として利用し、「物に貶める」。それがもっとも顕著なのは、ヘローデス王から二度目の（彼が帰還しなかった場合の）マリアムネ殺害の命令を受けた腹心のガリラヤ長官ゾエムスに対する仕打ちである。ヘローデス王の形勢が絶望的になったとき、ゾエムスは命令のことをマリアムネにあらかじめ教え、彼女の指示を仰ぐ。それは、マ

リアムネを殺せば、彼自身も「民衆の復讐とローマ人たちの怒りにさらされることになる」（2191f.）という冷静で合理的な判断と、「あなたを守りたいと思ったから」（2196）という同情とも密かな好意とも取れる理由からであった。しかし、このような有能で独立心があり好意的なゾエムスさえ、マリアムネは、王を「裏切った」振りをする「見せかけ（Schein）」（3053, 3076）の「祝宴」に彼を引き込むことによって自らの処刑の道連れにしてしまう。ヴィトコフスキーが「自ら望んだ自身の死のために、この彼女の騎士を利用し、道具にし、悪用した」[9]と批判するのも、またもっともな理由があると言わねばならない。

しかし、このようなマリアムネの自分勝手で自己中心的な態度と考え方は、どう評価したらいいのだろうか。たとえば、先に引用したヴィトコフスキーは、この戯曲はそもそもその素材となった古代世界において考えなければならないという持論を持っており、マリアムネの自分勝手さもまた、由緒正しいマカベア朝の末裔であるという彼女の「Storz（誇り高さ）」にその根を見ている。なるほど、戯曲の中でも、ヘローデス王の妹で何かとマリアムネを敵視しているザーロメなどは、再三マリアムネを「誇り高」いといって非難している。しかし、私は、冒頭で引用したようなマリアムネの「人間性」の尊厳に対する訴えに嘘はなく、その主張は大切に考えるべきだと思っている。すなわち、マリアムネは出自や伝統の支配から解放された自由な女性とみなすべきである。ザーロメは、マリアムネ殺害の命令を受けた副王である夫ヨーゼフがマリアムネの様子を窺っているのを、マリアムネに誘惑され言い寄っていると考えてしまうような現実の見えない女性であり、彼女による「誇り高」いという非難も的外れである。

マリアムネがその家柄と出自から解放された女性であるということは、次のような母であるアレクサンドラに対する彼女の誇らかな言葉からも分かる。

あなたが紹介した男の妻になることを
私は選び、その男に夢中になるあまり
マカベア朝のことを忘れたのです。
彼が私に夢中になるあまり王であることを忘れたように。（1004-1007）

ヴィトコフスキーはこの箇所を引用し、「しかし彼女の中のマカベア朝の女は忘れられはしなかった」[10]と述べているが、なぜ彼がマリアムネ自身の言葉を否定できるのか、私には読み取れなかった。むしろ、このマリアムネの言葉は、すべてを捨てて愛にかけるという彼女の愛の在り様という点で、極めて重要であり、私はこのマリアムネの言葉を大切にしたいと考えている。彼女はたしかに「誇り高さ」をもった女性であるが、その「誇り」は生まれや門閥によるものではなく、彼女が命をかけるその愛の純粋さと絶対性によるものなのである。だからこそマリアムネは、そのような命を賭けた愛の決定的な破綻を認めざるを得なくなったとき、次のように叫ばざるを得ないのである。ここで彼女が、家柄や王位のことを言っているのではなく、ヘローデスとの愛を念頭に置いているのは明らかである。

私の過去も未来も無になってしまう。
私は何も持っていなかったし、今何も持っておらず、これらも
何も持たないでしょう！　かつてこのように貧しい人間がいたでしょうか！（2143-2144）

そして、その際忘れてならないのは、「彼が私に夢中になるあまり王であることを忘れた」という先の引用にも明確

に示されているように、マリアムネだけではなくヘローデス王もまた、このような絶対的である意味純粋な愛の実践者に他ならず、しかも彼ら二人ともそのような相手の愛を（少なくとも最初は）お互いによく理解していたということである。すなわち、ヘローデスは横暴な専制君主であるだけではなく、マリアムネがそうであるような純粋で絶対的な愛の実践者でもあるのであり、そのような「ロメオとジュリエット」と同じような意味でタイトルの「ヘローデスとマリアムネ」は理解すべきなのである。

## 第三章　ヘローデス王とは何者か

それにしても、この戯曲におけるヘローデス王の妻マリアムネに対する殉死の要求とその後の殺人命令の中には、どうしても横暴にして強制的な形をとった所有欲を見ないわけにはいかないと考える読者や観客も多いに違いない。

しかし、私は、たとえば次のようなヘローデスの言葉は単なる言い逃れや口実ではなく、むしろ彼の愛の真実を説明するものとして、言葉通りに取りたいと考える。

たとえお前の人間性を傷つけたかもしれないにせよ、
俺はそのことをよく分かっているし、
お前の愛を傷つけはしなかったのだ！（1831-1833）。

つまり、ヘローデスは「愛する人よりも命を大切にするような愛は、俺にとって何の値打もない」（1863f.）と考え、「命」よりも「愛」を優先するのである。このことは、注意深い読者なら気付くように、以前マリアムネが重病に臥せっていたときに、愛する者の死を耐えがたく思ってヘローデスの方が薬を飲んで死のうとしたことを踏まえれば、単なる弁解として片づける訳にはいかないだろう。さらにヘローデスが持ち出す殉死は、実は王としての体面も捨てた次のような懇願でもあったことに注意しなければならない。

相手が死ねば
お前が愛のために死ぬこと、
それは、お前に先だった者を急いで追いかけて、
存在と非存在の狭間で、
私が想像するに、最後の息に最後の息として
交じり合うためなのだ、それが分かっていれば、
進んで死を選ぶに値することだろう、
それは、恐怖の住む墓穴の彼方に
さらに恍惚を見出すことだろう、
マリアムネよ、俺がそれを望むことは許されているのか！（454-463）

私は、このような「恐怖の住む墓穴の彼方にさらに恍惚（Entzucken）を見出す」というような、神秘的な様相さえ見

せるヘローデスの愛の切実さに注目したい。つまりそれは、ヘローデス王という暴君の一側面に過ぎず、結局は彼の暴力性という本質によって否定されるようなものではなく、むしろ、まさにそのような絶対的な愛こそが、ヘローデスという人間の本質なのである。繰り返しになるが、マリアムネも言うように、「彼は私に夢中になるあまり王であることを忘れた」のであり、だからこそこの戯曲のタイトルにも、「ヘローデス王」としてではなく、単に「ヘローデス」として「マリアムネ」と並置されているのである。

しかし、そのような絶対的な愛は、なぜ成就しなかったのだろうか。

たとえば、一見は犠牲者にも見えるマリアムネを批判的に見るヴィトコフスキーやグリュンターなどは、彼女の「誇り高さ」や「ヒステリー」、その「常軌を逸した性格」[11]にその原因を見ているが、すでに第二章で述べたように、彼女の愛の純粋な一途さは否定できないと私は考えている。それを、単にヴィトコフスキーのように「コミュニケーション」の失敗とだけ説明するのは、マリアムネの愛を軽く考え過ぎているのではないだろうか。一方、相手のヘローデス王に原因を帰する見方も当然ある、というか冒頭でも見たように、それはある意味で自然な見方であろう。そういう中で、古い論考になるが日本の中野康存は、『ヘッベルの「ヘローデスとマリアムネ」に於ける愛の問題』の中で次のように述べている。すなわち、この作品は「孤独者が孤独を捨てようとする必死の要求を担う愛の契機を軸とするハンドルングの展開に依って始めて二重の意味の悲劇的と成る」[12]と、ヘローデスの愛を評価し、それを作品の主題と捉えながらも、結局はそのような愛を「内心の信頼の中に育てあげることを知らなかった」ヘローデスの「性急なエゴイズム」と「暴力的に強制する性急さ」[13]、に悲劇の原因を見ている。しかし、これもまた先に見たようなヘローデスの愛の真摯さを踏まえるなら、やはり受け入れがたいと言わねばならない。

このような中で注意を引くのは、非常に古い論考であるがクラウス・ツィーグラーの『ヘッベルの悲劇における人間

と世界』の中で展開している見方である。すなわちツィーグラーは、ヘローデスとマリアムネの切実な愛が成就しなかったのは、個々の人間やその何らかの行為に原因があるのではなく、「まったく一般的で形而上的な、超空間的で超時間的に該当する、現実と本質の対立」[14]に原因があり、そもそも無限を求める絶対的な愛は、有限な存在であるこの地上において、いかなる場合にせよ必然的に成就しないことこそが、この悲劇によって描かれていると考える。そもそも人間存在は、「完全な空虚とむなしさ、そして徒労という運命に不可避的に陥る」[15]という認識がツィーグラーの見方の根底にあると思われるが、このような形而上的な愛のペシミズムは、本稿で概観してきたようなヘローデスとマリアムネの愛の切実な激しさと、にもかかわらずそれが「復讐」で終わる戯曲の後半を念頭に置くなら、ある種の説得力を持っているように私には思われる。

しかし、ツィーグラーの見方は非常に魅力的ではあるが、その場合、戯曲の結末に登場する例の東方の三博士と彼らによる救世主の誕生の告知は、どのように考えればいいのだろうか。もちろん、そこに古代の専制君主の没落と、それに代わるキリスト教のヒューマニズムの登場を読み取るのは、少なからぬ批評家がそのような表面的な解釈を述べてはいるが、やはり間違いであろう。本稿で見てきたように、ヘローデスは単なる専制君主ではないし、マリアムネは時期尚早のヒューマニズムの「犠牲者」ではないからである。しかし、かといってツィーグラーのように、戯曲全体にそぐわない取ってつけたような「不自然な」拵え物としてまったく無視するのもまた間違いであると思われる。というのも、三博士はほんの通りすがりの脇役として登場するのではなく、主人公のヘローデス王に対して直々に「王たちの中の王」の誕生について語って聞かせるからである。やはり、このような舞台設定には、ローレンス・ライアンが『悲劇と歴史』の中で言及しているような、世界史的な事件を持ち出すことで、この戯曲において展開されている出来事とテーマを世界史の流れの文脈に置き、世界史の中に位置づけたいという作者の歴史意識を読み取るのが自然であろう。[16]とはいえ、

繰り返しになるが、ここでの世界史の流れが意味するのは、キリスト教のヒューマニズムの登場ではない。

この点で、次のような東方の博士たちとヘローデス王が交わす意味深長な会話が示唆的である。イエスの誕生を念頭に置いて、博士たちが

そなたに息子がひとり誕生したか？（3136）

と尋ねるのに対して、ヘローデスはこう答える。

俺に？　いや、俺の妻が死んだのだ！（3137）

ここで注意すべきは、マリアムネという一人の「個人」とイエスの誕生が並置されていることである。つまり、ここで問題なのは救世主が生まれたということよりも、むしろマリアムネという極めて「個性」の強い愛する女が死んだ、ということなのであり、それがヘローデスにとっては救世主の誕生に勝るとも劣らない意味と影響を持っていることを、この一節は示している。そして、このマリアムネの死への言及がいわば伏線となり、この戯曲全体の文字通りの結末も、これまた強烈な「個性」の持主たる愛する男ヘローデスが倒れることによって幕を閉じる。このような場面に注目するなら、ここで作者が描きたいと思った世界史の流れとは、「個人」が闊歩する時代のことであり、そのような時代の特徴であったと考えるべきであろう。さらにその時代がどんな時代であるか詳しく知るために、先に言及したライアンの論考『悲劇と歴史』を参考にしながら、次章で考えてみたい。

## 第四章　「自由」と「「偉大なる」個人」

ライアンの解釈の基本にあり、その大きな功績のひとつになっているのは、本稿を始めヴィトコフスキーもその流れで論考を進めている見方を、はっきりとした原理として定式化していることである。つまりそれは、ヘローデス王とマリアムネ王妃という一見は加害者と「犠牲者」として対照的に見える「両者の内なる同質性」である。[17] しかしライアンの場合それは、本稿で強調してきたような両者の愛の切実さといういわばポジティブな面よりも、むしろ人間を「物」のように扱うというネガティブな側面に向けられ、彼はその特徴と原因を追及しようとする。

その際、明らかにそう見えるヘローデス王だけではなく、一見は「犠牲者」に見えるマリアムネ王妃もまた、そのような非難を免れないことは本稿でも見たが、ライアンはそのような両者を「「偉大なる」個人」ないし「個別人（Vereinzelte）」と呼び、[18] その特徴を明らかにしようとする。ここで注意しなければならないのは、この「個別人」と、それが表す原理が元来必ずしもネガティブな側面だけ持っているのではなく、自由や独立の源泉となるものでもあるということである。すなわち、「個別化」の原理は、本稿の冒頭で言及したような「人間性」を生み出す根源であり、「人間性」に必須の構成要素でもある。しかし、「ヘローデスとマリアムネ」は「まさにその個別化と結びついた過剰ゆえに挫折する」。「彼らの自由が罪となる」[19] とライアンは述べているが、なぜ「自由が罪となる」のかについて、ライアンの解釈に基づきながら次に見ていきたい。

ヘローデスのマリアムネへの愛が、少なくとも当初は切実で真摯なものであったことは、本稿でもすでに論じてきた

が、ライアンもまたそう考えつつ、そこに「人間を軽視する独裁者の屈辱的な要求」や「人間個人への軽視」が見られないことを強調する。[20] つまり、ヘローデスは「「偉大なる」個別人」なのであり、むしろ、「個人」の「自由」を軽視する全体主義や、伝統を重んじる保守主義とは対立する。ヘローデスがどのように「個別人」であるのかを、ライアンは具体的には説明していないが、たとえば、同じようにヘローデスを「きわめて進取の気象に富んだ開明的な王」[21]であると考える佐藤は、ヘローデスの妹ザーロメやマリアムネの母アレクサンドラと並ぶ作品の重要な副人物であるパリサイ派の聖職者ザーメアスと比較すれば、ヘローデスの「個人主義」がよく分かると言う。すなわち、律法の字句の厳密な遵守を絶対とするパリサイ派に対してヘローデスは、そのようなパリサイ派を蔑視して、個人の自由と力量を最重要に考えているからである。

しかし、佐藤がそういうヘローデスの「個人主義」が、もっぱらヘローデス自身だけに向けられており、「妻や友を物化する暴君」[22]でもあると述べているのは、いささか厳しすぎる評価と言わねばならないだろう。というのも、そのような非難の根拠とされる殉死の要求が実際はヘローデスの愛の切実さの表れでもあることは前章で述べたとおりであり、この殉死をめぐる顛末を除けば彼は「暴君」というよりも、自身の能力だけを頼りに必死に現実と戦い格闘している一人の「個人」だからである。すなわち、ローマという大国の脅威と、その内部で繰り広げられる（アントニウスとオクタビアヌスそしてクレオパトラの）権力闘争の中で、自らの知恵と判断を頼りに何とか生き残りを図る小国ユダヤの王ヘローデスは、自由と弱肉強食を原理とする競争社会を生きるまさに「「偉大なる」個人」なのであり、そのような彼の危険と困難を戯曲は繰り返し描いている。

前からはライオンが、そして後ろからはトラが摑み掛り、

上からはハゲタカが嘴と爪で脅かし、
ヘビの群れの上にいる
寓話の男に俺は似ている。
どうでもいい！　俺はできる限り抵抗する。（255-259）

一方、マリアムネが、いかに個人の自由を大切にする女性であるかは、本稿の冒頭でも引用した、ヘローデスの殉死の要求に対する彼女の舌鋒鋭い非難の中に端的に見て取れる。

しかし、そのような自由を掲げる「個人主義」が愛と関わる時、それは愛を破壊せずにはいないとライアンは考え、それを描いているのがまさにヘッベルのこの悲劇だと彼は言う。というのも、ライアンによれば、本稿でも確認したようなヘローデスの殉死の元来の願望の中に表れていた愛は、この作品の中の言葉を使うなら、「夢」や「眠り」の状態においてのみ可能だからである。「自らの自由の意識へと目覚めるとともに、そしてその目覚めと結びついて、この自由を自由に使おうと試みることによって、ヘローデスとマリアムネは、彼らの愛がそれまで留まっていた「眠り」に触れてしまう」[23]。これによって、かつて「自らと相手を結びつけるものであった愛」が、「今や自らの存在を根拠づけるもの」となり、そのような「愛の真実性を確かめようとするヘローデスとマリアムネのあらゆる行為が」かえって「その真実性を終結させる」[24]のである。つまり、ヘローデスの殉死を迫る執拗さには、愛を現実に確証された形にしたいという「真実性」への切ない欲求があるのだが、マリアムネにはそれが自らの「愛の真実性」が信用されていないという嫌疑を引き起こす。一方、ヘローデスの「愛の真実性」を確かめずにはいられないマリアムネの厳しい対応は、彼女の愛の方こそ「真実性」にかけているのではないかという疑いをヘローデスに引き起こす。これらはすべて、「自由が自ら

を確証しようとすることによって」起こったことであり、そういう意味で「自由が罪となる」と言わねばならないのである。[25]

佐藤もまた、この戯曲（彼にとっては主にマリアムネ）に顕著に見られる「個人主義」と「自己主張」に言及しているが、それらそれぞれが持つ「正」の面と「負」の面という「二重性」について語るばかりで、[26]その「正」の面がまた「負」の面になってしまうという、両者の結び付きについての洞察がない。それに対して、それら両面の必然的・宿命的な結び付きの悲劇性を力説しているライアンの論考は魅力的である。またライアンの解釈は、この戯曲で描かれている愛の破局の原因について、一見そのように見える「自由」と「個人主義」の欠如や不足ではなく、むしろ逆にそれらの「過剰」と「際限なさ」[27]を明確に打ち出している点が、私には卓見だと思われる。

ところで、ライアンはそのような「自由」と「「偉大なる」個人」の運命を、古代末期の「異教時代に先鋭化されてはいるが、根本的にはあらゆる時代の人間」に当てはまることだと解釈している。つまり、前章でも言及したツィーグラーのような「超空間的で超時間的」な解釈に惹かれ、それを認めつつ他方では、東方の三博士を登場させる結末に見られるような作者の意図も無視できず、それは実際に作品の中に見られると考えているのである。そして、それは「歴史と結びつこうとするが、歴史に任せきりにはしないという試み」に基づくものであり、結果としては戯曲を「両義的」で「優柔不断」なものにしているとライアンは結論付けている。[28]

しかしながら、この作品で意識されている時代を、舞台となっている古代末期のユダヤであると文字通りに解釈する必要があるだろうか。むしろそれは、作者であるヘッベルがこの作品を書いていた時代、すなわち、まさに近代が本格的に始まり、その問題性が浮かび上がりつつあった時代と解釈することも可能ではないだろうか。実際また私はこのライアンの「自由」と「「偉大なる」個人」に関する論文を読みながら、彼は近代という言葉を一度も出していないにも

かかわらず、覚醒した「個人」がその個性を武器に繰り広げる近代の容赦ない競争社会を思い浮かべずにはいられなかった。そして、この戯曲において意識されている時代をそのような近代と解釈するなら、ライアンがこの作品のどちらかと言えば弱点と見なしている「両義」性や「優柔不断」さは、むしろ作品の強みになると思われる。なぜなら、すでに終わって決着がつきその後の推移も分かっている過去の時代とは違い、近代とは作者が生きている時代にまさに継続中であった時代であり、その評価は必然的に「両義的」であらざるを得ないし、そうあることが真実により近いと考えられるからである。（このことは、その近代の末裔である現代を生きる今日のわれわれ読者や観客にとっても当てはまると思われる）。

それと、もうひとつ、私がライアンの論文で不満に思うのは、ヘッベルがこの戯曲において愛を重要な契機としながらも、結局は「自由」と「「偉大なる」個人」の物語だとみなし、「愛の物語ではない」と結論を下している点である。[29] しかし、私は本稿で今まで述べてきたことを思い出してもらえば分かるように、この作品における二人の主人公たちの愛の切実さがこの作品の中心にあり、まさにこの作品のテーマとなっていると考えている。「自由」と「「偉大なる」個人」はこの章で見たように、愛を破壊せずにはいないだけではなく、にもかかわらず愛を求めずにはいられないからである。本稿の前半で私が強調してきた、「ヘローデスとマリアムネ」の愛の切実さが意味しているものは、このような不条理とも言うべき、近代社会における愛の不可欠性に他ならない。それは、王にまで成り上がった男が、それが彼のすべての行動と業績の源泉にあり、それなしには「今や俺は自分のために戦うことができない」と、次のように告白するほど必要なものなのである。

お前［マリアムネ］は、俺をお前に結び付けている魔法を知っている、

またその魔法が日ごとに強くなっていくのを知っている、
その上、お前は感じているに違いない、
お前の心がまだ俺のために高鳴っていると請け合ってくれないなら、
今や俺は自分のために戦うことができないと！（393-397）

「「偉大なる」個人」がこのように必要とし、なくてはならない愛とは、かつて神がそうであったようなものになったと言って過言ではないであろう。中世に神が占めていた位置を、近代においては「個人」の愛が占めるようになったのである。現にヘローデスはマリアムネの美しさを次のように語っている。

お前は美しいので、お前を見たものは誰でも、
自分の中でお前の姿がいつか消えるとは納得できず、
パリサイ人が当てにしている
永遠（Unsterblichkeit）というものを
ほとんど信じなければならないほどなのだ。（445-449）

それにしても、「ヘローデスとマリアムネ」という「「偉大なる」個人」にとって、なぜ愛がそれほど必要なのだろうか。それは、たとえばライアンも引用している次のようなヘッベル自身の解説の言葉が大きなヒントを与えてくれる。『ドラマについて一言』の中で彼が、戯曲がなすべきこととして、こう述べている。

自然の（ersprünhlich）関連から解き放たれた個人が、その想像を絶する自由にもかかわらず、依然としてその部分に留まっている全体に対して置かれている憂慮すべき関係を、ありありと描いてみせること。（一一巻、3f.）

すなわち、「解き放たれた個人」は「全体」を求めずにはいられないとヘッベルは述べているのだが、この「全体」を取り戻すことができる契機こそ愛という行為に他ならないのである。「部分」は何らかの形で「全体」をとりもださない限り、その安住の地を見つけることはできないであろう。だからこそ、「ヘローデスとマリアムネ」は、本稿で見てきたようにお互いを必要とし、求め合わずにはいないのである。しかし、戯曲『ヘローデスとマリアムネ』はその試みが「個人」には必然的に成就しないこともまた描いている。「「偉大なる」個人」にとって、愛は求めずにはいられないものであったが、しかし、それはまた求めても、恐らくは絶対に実現するものではなかった。このことを物語っているのが、「ヘローデスとマリアムネ」の悲劇であると言わねばならない。

## 註

ヘッベルの著作、日記、書簡に関しては以下の版を利用した。そして、日記（第一六～一九巻）、書簡（第二〇～二七巻）の場合は日付を、作品『ヘローデスとマリアムネ』（第二巻）に関しては引用直後に行数を記載した。その他の著作に関しては、巻数とページ数を示している。

Friedrich Hebbel: Sämmtliche Werke : historisch kritische Ausgabe; besorgt von Richard Maria Werner. Herbert Lang, Bern 1970, Nachdruck von Säkular Ausgabe, B. Behr's Verlag, Berlin.

（1）佐藤正樹『ヘッベルの「ヘローデスとマリアムネ」における歴史の問題』金城学院大学論集、第一八号、一九八四年、二四頁。

（2）Rainer Grünter: Hebbel. Herodes und Mariamne. In: Benno von Wiese (Hrsg.), Das Deutsche Drama. Bd. 2, 1958, S.124f.

（3）一八四七年三月一〇日の日記。

（4）Wolfgang Wittkowski: Herodes und Mariamne. Verweigerung, Verselbstigung, Gewalt. In: Tragödien Friedrich Hebbels. Peter Lang, Frankfurt am Main 2006, S.119.

（5）Wittkowski, a.a.O., S.134.

（6）Wittkowski, a.a.O., S.133.

（7）Wittkowski, a.a.O., S.142.

（8）Wittkowski, a.a.O., S.130.

（9）Wittkowski, a.a.O., S.122.

（10）Wittkowski, a.a.O., S.133.

（11）Grünter, a.a.O., S.135.

（12）中野康存『ヘッベルの「ヘローデスとマリアムネ」に於ける愛の問題』山形大学紀要「人文研究」第二号、一九五〇年、二五〇頁。

（13）前掲書、二五三―二五四頁。
（14）Klaus Ziegler: Mensch und Welt in der Tragödie Friedrich Hebbels. 1933, S.75.
（15）Ziegler, a.a.O.,S.74.
（16）Lawrence Ryan: Hebbels Herodes und Mariamne. Tragödie und Geschichte. In: Helmut Kreuzer (Hrsg.) Hebbel in neuer Sicht. Stuttgart 1963, S.262.
（17）Ryan, a.a.O., S.251.
（18）Ryan, a.a.O., S.256.
（19）Ryan, a.a.O., S.256.
（20）Ryan, a.a.O., S.258.
（21）佐藤正樹、前掲書、二九頁。
（22）佐藤正樹、前掲書、二九頁。
（23）Ryan, a.a.O., S.258.
（24）Ryan, a.a.O., S.258.
（25）Ryan, a.a.O., S.259.
（26）佐藤正樹、前掲書、二八―二九頁。
（27）Ryan, a.a.O., S.259.
（28）Ryan, a.a.O., S.265.
（29）Ryan, a.a.O., S.260.